

山本洋見理事長(共同代表)に聞く

母親として働く女性として考える ひきこもる子が 生きるための法整備を

取材・構成: たびだち編集部



KHJ理事を長年務めてきた山本洋見さんが、2023年4月、KHJの理事長(共同代表)に就任した。女性のひきこもりの多さに驚愕している世間に対して、「誰にも生きづらさはある」と断言する山本理事長に、今までの人生や「ひきこもり基本法」に望むことを聞いた。

子どもと一緒に学べることが嬉しい

結婚後20代でお店を持ち、14〜5年にわたって経営を続けてきたのは、「ただいま」って子どもが帰って来た時にお母さんがいるから。そして、お母さんが作ったおやつと一緒に食べて、「今日はどうだった?」と話せるような家庭を作れたかったからなんです。

私の両親は不仲だったし、両親とどこかに遊びに行った記憶もなかったけれど、子どもには同じ思いをさせたくないと、休日は子どもたちとあちこちに出かけました。

ただ、中には困ったこともありました。私は学生時代に母からお弁当を作ってもらえなかったの、子どもに作るお弁当がどういふものか分からなかったんです。そんなある日、私がインフルエンザで寝込んだら、高校生の娘がお弁当を2つ作って、ひとつを枕元に置いていってくれました。娘が

作ったお弁当を見て、初めてこういうお弁当が欲しかったんだって気づいたんです。

こうやって私が経験していないことも、子どもと一緒に経験することで一緒に学べることを嬉しく思うんです。今でも帰省した娘によく注意されてしまい、気づかされることも多いです。

石器時代から続く女性の生きづらさ

例えば、「女社長」といわれることはありますが、「男社長」とはいわれない。女性であるということだけで、社会的にハンデを背負っているんですよ。

ずっと昔から、それこそ石器時代とか、マンモスを倒して食べていた時代は、腕力が勝る人が偉かったんだと思います。子どもを産んで育てる女性は、マンモスとは戦えなかったはずですから。それ以来、立場が弱くなって、今にまで至る長い歴史があるのかもしれない。

でも、今はマンモスを倒さなくてもいいし、重労働はロボットがやってくれるようになった。そうなる、男性の価値は何なんだとふと思っんです。昔から女性の価値は、「子どもを産む」「ことだと言われてきたけど、じゃあ子どもを作れない男性は価値がない

のではないかな? きっと男性は、そんなことを言われたら耐えられないでしょう。

でも女性は、じつとつむいで耐えてきたし、いろいろな差別を我慢してきて、自分が生きづらなくてもじつと黙っていました。

それが最近、だんだんと「別に女性だからといって黙っている必要もない」という気持ちが生まれてきています。自分も「ひきこもってる」「苦しいんだ」と言ってもいいんだと、自然な感じになってきたのが嬉しい。よくぞ、今回の内閣府ひきこもり実態調査において、「私も、そうです」と女性たちが手を挙げてくれたと思いました。

人間なんだから、「男ゆえの生きづらさ」「女ゆえの生きづらさ」があるのは当たり前です。

親亡き後、誰にも言えなかったら犯罪なのか?

例えば、8050問題が身近に迫ってきていて、世の中でのいろいろな事件が起きています。

具体的にいうと、父親や母親が亡くなった後に、取り残された(高齢の)ひきこもりの方が親を看取ることができません。なぜなら、どこにも相談することができないし、分からないからなんです。途方に暮れている間に日が

経ってしまい、それが発覚すると、警察に犯罪者として捕まってしまう。「なんて悲惨なことなんだろう」と涙が出てしまいます。

なぜなら、私の息子も学生時代のいじめがきっかけで、21年間、自室にひきこもっていたからなんです。もし、私の息子が1人取り残されて「お母さん、お母さん」と言っている間に日が過ぎて、どこにも言えなかったとしたら、これって犯罪なのでしょうか？

これは事件ではなく、社会の歪みの結果だと思えます。責任が本人と家族だけにあるようなことは絶対に言わないでほしい。ひきこもりながら暮らしていても、どこかにつながってきちんとケアされていれば、亡くなった親を送ることができたはずですよ。

「孤立している本人や家族をどうしたら守れるのだろう」と真剣に思います。そのために、国がひきこもり基本法を定め、支援の方法や道筋を日本国中、隅々にまで行き渡らせることが必要であり、法制化が必要不可欠だと感じています。

もう一つ、基本法があることで、行政とのやり取りも楽になると思っています。今、行政の方も、ひきこもり当事者や家族に対して、どうして対応しているのか分からないと辛く思っている人もいると思います。支援する側、され

る側の両方が、別々の思いで困っているのです。

そのためにも、法律を整備することが必要だし、全国推定で146万人の人(50人に1人)がひきこもり状態とされているのに、その根拠法となる法整備がないのはおかしいと思います。

家族会を続けてきて息子への思いは変わった

私の息子は19歳の時、自分の持ち物を庭で焼き払い、「死のう」と思ったが、ひきこもっても生きようと思う」と言って、その後21年間ひきこもりました。

ひきこもっている間、自分の食事は自分で作り、家の中で静かに自立して暮らしていました。その間、親の呼びかけには応じず、無言で通しました。

私もどのように対応していいのかわからず、精神保健福祉センター内の「のぞみの会」という家族会に、前所長の元で月1回通っていました。ところが、所長の交代により、「のぞみの会」は解散するのでセンターから出て行ってほしい」と口頭で言われ、やむなく現在のNPO法人「てくてく」を設立しました。

同時に、当事者、親が体を動かせる場所として「てくてくファーム」を開園しました。無農薬自然栽培の野菜をスーパーに出荷して、活動資金の一

部にしています。その畑から単立していた当事者は、就労を果たし、社会参加しています。

家族会の活動を続けるうちに、息子に対する思いは変わってきました。最初の頃は、「出てきてほしい」「就労してほしい」と願っていたんですが、次第に「気が済むまでひきこもっていていい」「就労は2の次3の次」「いつまでも待っている」というように変化していきました。家族であっても、「それぞれの道を歩いて行けばいい」と、今では思っているのです。

生き延びるために知恵を働かせて

元々、おおざっぱな性格なのでざっくりとやっていますが……。及ばないこともあると思うけれど、目の前のことを1つずつやっていきたいと思っています。1人でできることはひとつもないですよ。

いろいろな人の力が集結してKHJも成り立たせているし、一人ひとりの力がKHJを支えていると思っています。「浜松でてくてく」も同様、いろいろな人が関わってくれることで成り立っていますね。

一人ひとりが代表だなど思っているから、みんなやっていきたいと思っています。ひきこもっている人、ご家

族も、生きていってほしい」と願っています。

自分ができることから、始めたい。苦手なところは後回しして。

これは私自身に言い聞かせていることです。目の前の事からやってみる。

ちなみに私の場合、机の上の整理整頓から……。

■やまと・ひろみ KHJ全国ひきこもり家族会連合会共同代表理事。NPO法人てくてく理事長。1992年、中学生の息子が転校先でいじめにあい、ひきこもり状態になる。2011年、ひきこもりの家族会を浜松市に立ち上げ、2013年KHJ加入。2020年、息子が自室で突然倒れるが、九死に一生を得て、現在は高次脳機能障害者としてグループホームで暮らしている。2023年4月からKHJの共同代表に就任。

